
The Cyber World

電子の鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Cyber World

【Nコード】

N0122Z

【作者名】

電子の鷹

【あらすじ】

小学生の頃にはもう自分のパソコンを持っていた。そして中学3年生を卒業する頃には伝説的なハッカーになっていた。その青年にはもう世界のセキュリティはタダの南京錠以下になっていたのである。

そんな青年が普通に高校に通い。普通の学校生活をおくりながら電脳世界で生きていくストーリー

プロフィール

登場人物

・天沢 七威斗 あまさわないと

桜坂高校に通う高校2年生。普段はどこにでもいる高校生だが電腦世界では伝説的なハッカー、Local STARを名乗っている。親は小さい頃に他界。今は一人で暮らしている。

・遠藤 沙織 えんどうさおり

主人公とは小学校からの幼なじみ。最近七威斗に恋愛感情を持ち始めている。

・倉井 隆之介 くわいりゅうのすけ

桜坂高校に通う高校2年生。主人公とは仲のいい友達。

・佐藤 燈真 さとうとうま

桜坂高校に通う高校2年生。親が金持ちだが海外に住んでいて大きい家に一人暮らし。

~~~~~

新学期。俺は通いなれた通学路を歩いていた。その通学路の一角にある公園は春になると沢山の桜を咲かす名所だった。その通学路を通るのは少し遠回りなのだが俺は時間がある日はいつもここを通して学校へ向かっている。

そんな桜を見ながら「新学期に相応しい天気だなあ。」と快晴の空を仰ぐ。

そうこうしているうちに公園の出口が見えてきた。この公園を出るとすぐに学校だ。

この学校に通って2年目になるけどやっぱりいい通学路だなと思う。

さあ、今日は始業式だ。張り切って行こう。と気を引き締めて校門にむかって歩き始める。

## 第1話 始まりの日（前書き）

えー、ハイペースですが暇なときはどんどん更新していくのでどうぞご覧ください。

## 第1話 始まりの日

教室にはすでに半数以上の人がいた。

その中から一人りの女子がこちらに気づく、そしてこちらに向かってくる

「おはよう。遅かったね」と微笑んでくる。

「おう。ちょっと散歩がてら歩いてたらこんな時間になっちまった。」

「桜公園だね。七威斗あそこ好きだもんねえ」

「まあな」

そして俺は窓側の一番後ろに座る。

携帯を開き、自宅のデスクトップpcをリモートアクセスし、作りのかけのプログラムを開く。最後のバグ修理をしていると先生が教室に入ってくる。

「よし、お前ら、廊下に並べー。」携帯をしまい廊下に出る。

そして並ぼうとすると倉井が近づいてきた。

「おす、元気ねえな」と話しかけてきた。

「そうか？俺はいつも通りだけど」

「そつか。ならいいけどよ。今年こそは気づいてやれよ。（ニヤニヤ）」

「何に？」と当然の疑問を投げかけた。

「えっ、・・・マジで気づいてないの？」

「だから何にだよ。」

「かわいそうに。まあ、その話はおいといて早く並ぼつぜ」と走っていく。

「なんなんだよ。」といいながら俺も列に並ぶ。

～～講堂～～

ここの学校は私立なだけあって設備がかなり立派だ。それだからか1000人ぐらいは入るだろう。

そして校長やその他先生が話を進め。最後に新学期の諸注意を話し、終了。

1学年から教室へ戻り始める。

沙織が近づいてきて

「ねえねえ、今日はこれで学校は終わりだけど。・・・（もごもご）」とが口をもごつかせる。

「？なんだよ。」と沙織の顔を見る。

(カアア)「いや、だから、あの・・・これからどこか遊びに行かない？」

「あ、ああ。いいよ。じゃあ、2時くらいに桜公園の前でいいか？」と当然のように言う。

「うん！。じゃあ、後で！」と言ってさっそく教室から出て行く。

そこでめずらしく燈真が

「よお、ひさしぶり。春休みは元気にしてたか？」と話しかけてきた。

「ああ。普通通りさ。」

「そつか。で、これからの予定は？」

「沙織に誘われてるけど、なんで？」

「いや、ラーメンでも食いに行こうかと思ったけど沙織ちゃんならダメだな。しっかり遊んでこいよ。」と言いながらカバンを持って教室を出て行く。

「ヘンなやつ。」

さて、俺も帰るかな。とカバンを取り出し荷物を詰める。

そして昇降口へと向かう。



そして桜公園を通り家へ向かう。

「ただいま」といっても家には誰もいない。親は小さい頃に既に他界している。今は引き取ってくれた従兄弟に仕送りを少ししてもらいながらアパートに住んでいる。

俺の部屋はデスクトップpcが占領している。

本体が3台ありそれが床においてある5台のディスプレイにつながれている。

そして持ち歩きよ用のノートpcを電源アダプタにつなげる。

制服から私服に着替え、パソコンの電源を入れる。

暇なので防御用プログラムを書き始める。

〳〳2時間後〳〳

そろそろ時間だな準備するか。と壁にかけてあるカバンをとってノートpcをカバンに入れ、財布などをポケットに入れる。

そしてパソコンの電源を落とし、冷蔵庫からお茶を取り出して飲む。

「そろそろ行くか。」とカバンを持って外にでる。鍵を締め、鉄階段を降りる。

桜公園に着き時間まで30分ぐらい余裕があるので桜公園を散歩し始める

「いい天気だなあ」とそのへんにあるベンチに座る。

あれやこれやとしているうちに時間がきた。

「よし、入り口に行くか。」とベンチから立ち上がり入り口の方へ歩いていくとすでに沙織が私服でいたので、驚かせてやろうと思い後ろから静に近づいていく。まったく気づかないのでそのまま

「おっす!!」と肩に手をやると

「うわああ!!!!」と思いつきりビビった。そこまでビビるか普通?

「わりい、そこまで驚くとは・・・」

「う、ううん。少し緊張してたから」と笑った。

(普通にカワイイ・・・)

「どうしたの?」と声をかけてきて俺は我にかえった。

「あ、いや。なんでもない。」

「そっか、じゃあ。行こう。」と俺の手を引いていく。なぜだろう、前にもずつとやっていたことなのにちよつと心がくすぐつたい。

そんな事を考えながら俺は桜公園を後にして沙織と一緒に駅へと向かっていく。

## 第1話 始まりの日（後書き）

．．．締めが悪すぎるんですが。

スイマセン。駄文ですがご愛読ありがとうございました。

次回作もよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0122z/>

---

The Cyber World

2011年11月30日22時46分発行